「穴さがし心の内そと」における罵り表現について
—助動詞・補助動詞を中心に—

村中淑子
桃山学院大学
tmuranaka@andrew.ac.jp

A Study of Evil-speaking in the Fiction of the Late Edo Period
: Focusing on Auxiliary Verbs

MURANAKA Toshiko
St. Andrew's University

Key Words: Treatment Expression, Osaka Dialect, Language Control Skills

１　はじめに

罵り表現[1]についての研究は多くない. おそらく，罵り表現を使うことはよくない，下品なこと，という評価意識がつきまとうことから，研究対象としての価値も低いと考えられがちなのであろう[2].

しかし，人はいわゆる良いことばのみを使って生活しているわけではない. 人々の言語生活を全体として見渡し，そのしくみを明らかにするためには，良いことばも悪いことばも研究すべきであろう. 罵り表現の研究が今までに少なかったならば，それを増やすことには意義があると考えられる.

罵り表現の機能として，次のようなものが挙げられる[3].

① 聞き手もしくは第三者を低く位置付けていることを示す. マイナス待遇表示機能.
② 聞き手もしくは第三者への親しみの気持ちを表す. 親愛表示機能.
③ 聞き手もしくは第三者への怒りを表出して，憂さを晴らす. カタルシス機能.

これらの機能が，具体的にどのような場面でどのように働いているかを調べたい. 言語表現の働きを明らかにするためには，時代と地域を限定することが一つの有効な手段である. そこで本稿では，近世末期の大阪に的を絞ることとし，一荷堂半水の戯作「穴さがし心の内そと」を用いて検討する.

２　調査対象と方法

2.1　調査項目

本稿で調査の対象とする言語項目は，ヤガル，クサル，サラス，テケツカル，ヨル，テヤル，テコマス，の７語である. 先行研究に触れながら，順に説明を加える.

まず，ヤガル・クサル・サラス・テケツカルの４語について．これらは前田(1949)で「相手の動作を口汚く云ふ形」，罵詈形としてあげられているもので，郡(1997)でも「見下げて言う表現」として列挙されている．いずれも聞き手もしくは第三者の動作につく語で，飲みヤガル・飲みクサル・飲みサラス・飲んデケツカルのように接続する．牧村(1979)ではこの４語はすべて見出し語となっており，かつ，それぞれの語意説明の中に他の３語が同義語としてあげられている．以上のことから，ヤガル・クサル・サラス・テケツカルの４語は大阪方言であり，かつ，ほぼ同じ意味を持つ罵り表現であるとみられる．ちなみに楳垣(1962)は，ヤガル，クサル，サラス，の順で憎悪の感情が高まり，テケツカルに至って最高潮に達する，という．

次に，ヨルである．山本(1962)には罵詈表現としてヨル・ヤガル・クサル・サラスがあげられており，「ヨル・ヤガルは相当広く用いられるが，クサル・サラスは，中年以上の主として男子に用いられるきわめて下品なことば」とある．ヨルについては，卑語形式として西尾(2005)で詳しく分析されている．ヨルは第三者の動作につく語で，行きヨルのように接続する．

そして，テヤル（タル）・テコマスの２語である．山本(1962)は，大阪方言における供与的動作を表すものとして，テヤル→タルをあげ，その罵詈表現として，テコマスをあげている．テヤルは一見，罵りではないようにも見えるが，明鏡国語辞典によれば，テヤルには，「①同等以下の人などのために何かをする意を表す」と「②強い意志を持って，相手に悪い影響の及ぶ行為をする意を表す」の２つの意味がある．この②の意味で使われる場合，相手への悪意を表明するものであることから，罵りと同様の意図があると解釈できる．テコマスも同様に②の意味がある．この２つの語形は，自分の動作につけるもので，行っテヤル・行っテコマスのように接続する．

以上，見てきたように，ヤガル，クサル，サラス，テケツカル，ヨル，テヤル，テコマス，の７語はいずれも近代の大阪方言における罵り表現の類であるとみなせる．そして，近世末の大阪方言でもほぼ同様であると予測し，本稿での調査項目とする．

罵り表現には，アホ・バカヤロー・オノレ・アイツのような名詞・代名詞や，ヌカス・ウセルのような動詞[4]，あいつメやドたぬきのような接尾辞・接頭辞もあるが，本稿では助動詞・補助動詞に絞って詳しくみることにする．

2.2　資料

幕末期の上方語の代表的資料である一荷堂半水の戯作「穴さがし心の内そと」(1864 ごろ)を調査資料とする．前田勇が翻刻したものを用いる（前田 1974）．この作品は，前田が解説しているように，短文を連作風にまとめたものであり，人物の表面的言動と裏面的実相を描く，という体裁を取っている．上方語を豊富に含み，登場人物が多彩で，出現することばづかいのバリエーションが豊かである．罵り表現というのは，その性質上，一般の

方言談話資料にはほとんど出てこないものであり，質問票調査で扱われたものも少ないようである[5]. ゆえに，虚構の物語であっても，人物とことばづかいとの関係がよくできた作品であれば，罵り表現を調べるための資料として重要であると考える.

2.3　方法

まず，対象とした罵り表現の出現数を数える. 次に，用例を全て抜き出して，意味と文脈を確認する. そして，使用人物や場面設定と罵り表現の出現状況との関連を見ていく.

３　結果

3.1　出現数について

本稿で扱う罵り表現が「穴さがし心の内そと」に出現した数を，表１に示す.

表１　「穴さがし心の内そと」における罵り表現（助動詞・補助動詞）の出現数

	語形	出現数
聞き手もしくは第三者の動作につく語	クサル	9
	ヨル（オル）	6
	テケツカル	4
	ヤガル（アガル）	2
	サラス	0
話し手の動作につく語	テヤル	6
	テコマス	0
計		27

このように，「穴さがし心の内そと」における罵り表現としての助動詞・補助動詞の合計数は 27 となるが，これはほぼそのまま，この作品におけるマイナス待遇の助動詞もしくは補助動詞の出現数であると考えてもよいだろう. 一方，同じ「穴さがし心の内そと」におけるプラス待遇の助動詞もしくは補助動詞の出現数を見ると，ナサル 40，ナハル 6，ヤハル 0，ハル 0，テ敬語 28，合計 74 である[6]. つまり「穴さがし心の内そと」に現れる待遇の助動詞・補助動詞のうち，約 4 分の 1 がマイナス待遇であり，罵り表現であったと言えるだろう[7].

サラスとテコマスがゼロであったが，この作品にたまたま出現しなかっただけであり，この時期の大阪にこの語形が無かったことを意味するのではないだろう. というのは，近世の様相を知るために，国立国語研究所『日本語歴史コーパス』をオンライン検索ツール「中納言」によって検索したところ，サラスが大坂板洒落本に２件あり，テコマスは虎明本狂言集に１件，大坂板洒落本に９件，京都板洒落本に４件，計 14 件あったからである[8].

3.2　全用例とその検討

語形ごとに用例を全て挙げていく[9]. 用例の後ろのカッコ内は，「話し手→聞き手，待遇の対象，話の番号」を示す. ただし，待遇の対象が聞き手と同一の場合は，繰り返して書く代わりに＊の印をつけた. 話の番号は，原文（前田勇の翻刻）につけられているもので，初ノ一から初ノ十五，二ノ一から二ノ十五，三ノ一から三ノ十五まである[10].

3.2.1　クサル

クサルの９つの用例は次のとおりである.

(1) なにをぬかしくさる（和尚→弟子，＊，初ノ七）
(2) 節季(せつき)になると私(わし)にことはりばかり言(いわ)しくさつて（女房ひとりごと，亭主，初ノ八）
(3) ようまアこんなことを書(かい)ておこしくさつたナア（女房ひとりごと，亭主の相手，初ノ八）
(4) アノ爰(ここ)な狸(たぬき)めが狐(きつね)にだまされて居るのもしらずにわしまでだましくさつたナ（女房→亭主，＊，初ノ八）
(5) 何(なに)ぬかしくさるゾ（番頭→丁稚，＊，初ノ十二）
(6) 又(また)ゆかねバ例(れい)の悪口(わるくち)ぬかしくさるがいやさに（風流人→嫁，風流仲間，二ノ二）
(7) ゑらさうにポンポンとぼうはりくさつて[11]（中居→同僚，客，二ノ九）
(8) とうふやまでが哢(なぶり)くさる（嫁→隣の内儀，豆腐屋，三ノ十）
(9) それハともかく此様(こん)な処(とこ)へ折(をり)々来くさつたら（親父→手代，＊，三ノ十五）

順に文脈を確認していく. (1)は，食い意地の張った弟子から，次も湯葉の代わりに卵を使ってほしいと言われて，和尚が怒ってみせるところである.「ぬかす」の主体は言いたい放題の弟子であるが，直前に，生臭ものを食べられる寺だと聞いて奉公に来たのだという弟子に向かって，和尚はアハハハと笑って答えているので，(1)のセリフも本気で怒っているのではないように思われる.

(2) (3) (4)は，亭主の留守に紙入れの中に手紙を発見し，悋気を起こす女房のセリフである. (2)は「言わしくさって」であり，「言わす」という使役形にクサルがついている. 亭主の代わりに節季の断りをしばしばさせられる，つまり掛売りの代金を払えない言い訳を言わされていることへの怒りであり，「言わす」のは亭主である. (3)は「書いておこす」とあることから，手紙の書き手，すなわち亭主の浮気相手への怒りであろう. (4)は亭主を狸，亭主の相手を狐と呼んで罵っている.「だまされて」いるのは亭主であり，「わしまで」というと，「だましくさった」主体は亭主の相手であるとも解釈できそうだが，文法的には「だまされている」と「だましくさった」の主体を揃えるのが適当であること

と，ここまで一人で怒っていたところにちょうど帰宅した亭主に詰め寄っている場面なので，「だましくさった」主体は亭主であると解しておく.

(5)は夜這いを見つけられた番頭が，丁稚に大声を出すなと何度も言うが，丁稚は黙ろうとせず「寝とぼけて居なさるかと」などというので，何を言うかと番頭が丁稚を叱りつける場面である.

(6)は風流仲間から無風流と悪口を言われることを恐れ，寒さを我慢して雪見に出かけた人物が，帰宅後，いまいましい気持ちを女房にぶつけている場面である.

(7)はいつも来る旦那の代理で客として来た手代を丁重に送り出した後，その手代の偉そうな態度への腹立ちから同輩にこぼす中居のセリフである.「ぼうは」った（意地を張った）のは客としてきた手代である.

(8)は姑が倹約のため，おからをしばしば買いにやらせるので，豆腐屋からウサギでも飼っているのかとからかわれたことで，腹を立てて豆腐屋を罵る嫁のセリフである.この後ずっと姑への悪口が続く.「なぶりくさった」のは豆腐屋だが，嫁の怒りの対象は豆腐屋よりもむしろ姑である.

(9)はたまたま出くわした息子が仕事中のはずなのにご馳走を食べていたらしいことを非難している父親のセリフである.怒っているというよりは遠慮のない間柄でズケズケと話している感じである.

3.2.2　ヨル（オル）

ヨルまたはオルの６つの用例は次のとおりである.ヨルに変化していないオルの形が，６つのうち５つを占める[12].

(10)びつくりさせおつた（さむらいひとりごと，炭火，初ノ五）

(11)毎日々々やかましいいふてきをる小間物屋が（女郎ひとりごと，小間物屋，初ノ十）

(12)大ちやくなことして最前から勝ていをるのじやエヽいまいましい（姑→下女，＊，二ノ十五）

(13)鑓を入よるさかひ的さんも大疳癪で（稽古屋→女房，聴衆，三ノ二）

(14)聞れるならこゝへ来て聞ひて見ひと云おつた（稽古屋→女房，聴衆，三ノ二）

(15)湿煩でをつて毒禁ハしをらいで（親父→息子，＊，三ノ十五）

(10)は銃の音を聞き，襲われると身構えた侍が，実は炭のはぜる音だったと気づく場面で，「びっくりさせた」主体は炭ということになる.ただし，この侍は自分の動作にもオルを付けている（「此ところに相待おるに」）.この場合，マイナス待遇というよりは尊大さを表しているようだ.

(11)はあちこちに支払いをためている女郎が，細かい支払いを小女に行かせた後，大口の借りを返す算段をする中で一番大口の貸し主である小間物屋に言及するセリフで，この後に「あいつハ誠にいまいましひ腹の立奴じやよつて」とあり，小間物屋に対してかなり強い罵りの気持ちがあるように見える.

(12)はカルタでズルをした下女をみた姑が「下女の胸先引とらえ」て「コレおのれハまアまアこんな大ちやくなことして」と言っているので，「勝ていをる」の主体は下女すなわち目の前にいる話し相手であり，ヨル（オル）には珍しい対者待遇の例である.

(13)は，教え子が下手な浄瑠璃を披露しているところに聴衆が槍を入れた（野次を飛ばした）ので教え子（的さん＝あいつ）が癇癪を起こして・・と稽古屋が女房に話しているところである.稽古屋はこの教え子についての悪口を延々と話しており，聴衆が槍を「入れよる」，とはいうが聴衆を罵っているようではない.さほど強い罵りの意味を含まないヨルであろう.興味深いことに，この教え子の動作には，罵りの助動詞も補助動詞もつけていないのである．おそらくここでのヨルは親しみを表すもので，稽古屋は教え子よりもヤジを飛ばした聴衆の方に親近感を覚えているということであろう.

(14)は(13)のすぐ後のところで，野次られた教え子が「語られるならここへきて語ってみい」とわめき，聴衆が「聞かれるならここへきて聞いてみい」とやり返しているところである.「言いおった」のは聴衆であるが，(13)と同様，稽古屋からすれば聴衆を罵る意図はなさそうである.

(15)は上記の用例(9)「それハともかく此様(こん)な処(とこ)へ折(をり)々来くさつたら」の直前の部分で，父親がたまたま出くわした息子に「わりや平助ぢやなひか」と呼びかけ，その後に「湿煩(ひつやん)で・・」と話しかける.「ひつやんで」（湿病んで＝梅毒をわずらって）いるのに「毒禁(どくいみ)」（毒忌み：体の害になるものの飲食を避けること）もしない息子を非難している.用例(12)と同様，目の前にいる話し相手を動作の主体とした表現である.

3.2.3　テケツカル

テケツカルの４つの用例は次のとおりである.

(16)此方(こち)の蕩夫(のろけ)めがどこへいてけつかるのじや（女房ひとりごと，亭主，初ノ八）

(17)たつた二こうりのにつくりにいつまでかゝつてけつかるのじや（番頭→丁稚，＊，初ノ十二）

(18)あつかんで一(いつ)ぱいくれんカ何をぐづぐづしてけつかるゾ（風雅人→嫁，＊，二ノ二）

(19)手先(てさき)が肥前(ひぜん)に首(くび)すじが紀州(きしう)とのおまけにお片目(かため)といふ面(つら)でハ恐(おそ)れ入(いり)がらのじりじりときてけつかるアハヽヽ（丁稚→夜鷹，＊，二ノ七）

(16)は用例(2)(3)(4)と同じく女房が浮気亭主を罵っているところ.亭主の帰宅よりも前の時点で，亭主がどこに行っているのかと憤っている.

(17)は仕事の遅い丁稚を番頭が叱りつけているところ.このすぐ後に「ごくどうめ」「コリヤまたぢようだんさらすか」と言っており，強く罵りながら仕事をさせようとしているところである.

(18)は用例(6)の後に出てくるセリフで，ずっと風流仲間の悪口を言い，ぼやき続けているのであるが，寒さよけに熱燗を所望し，それが遅いと女房に文句を言っているところ.ぐずぐずしている主体は女房だが，女房はとばっちりを食った形であり，風雅人の怒りの主な対象は雪見をさせた仲間であろう.

(19)はお使いの仕事を終えた丁稚が，もくろみ通り西横堀川沿いをぶらぶら歩いて惣嫁（夜鷹）を冷やかしているところ.肥前・紀州の国名と同音の病名をかけたり（ひぜんは疥癬と同じことで皮膚病，きしゅうは梅毒でできる腫れ物の俗称），「恐れ入る」と「煎り殻」をシャレて続けたりして，夜鷹をやや見下した感じでからかいながら楽しんでおり，アハハハという笑いに繋いでいる点からも強い罵りは感じられない[13].

3.2.4　ヤガル（アガル）

ヤガルまたはアガルの用例は，次の２つである.

(20)外に用事もなしにわざわざ歩行せあがつて（風流人→嫁，風流仲間，二ノ二）

(21)ヱヽ置やがれ（幇間菊八→女房，＊，三ノ五）

(20)はヤガルに変化していないアガルの形.用例(6)と同じく気の進まない雪見をさせられた恨みで，仲間の悪口を言い続けているところである.

(21)は，実質的な意味はさほどない決まり文句であり，軽い罵りであろう.置やがれと言われた女房は「寐てやせんがな」と返す.「起きやがれ」と受け取ったフリの返しで，軽くいなしたような受け取り方をしている.

3.2.5　テヤル

テヤルの６つの用例は次のとおりである.

(22)面もどこもかもかきみしつてやるハ（女房ひとりごと，亭主，初ノ八）

(23)わしや外聞わるしてやるのじや（女房→亭主，亭主，初ノ八）

(24)私に角が有たら此じんばり面を突さがしてやるのに（女房→亭主，亭主，初ノ八）

(25)それを又づらしてやつたらゑらふ怒り升やろうナ（女弟子→女髪結，客，初ノ十五）

(26)今度のさらへにどつとなんぞで此入合せしてやりたいナ（代稽古の娘→舞屋師匠，教え子，二ノ四）

(27) じあいの所なら弾(ひき)つぶしてもやるけれど（稽古屋→女房，教え子，三ノ二）

(22)(23)(24)は，用例(2)(3)(4)(16)と同じく，浮気亭主をなじる女房のセリフである．「かきみしる（かきむしる）」「外聞を悪くする」「顔を突きさがす（突きまくる）」はいずれも亭主に対して女房が行う行為であり，怒りの大きさが伺える．「②強い意志を持って，相手に悪い影響の及ぶ行為をする意を表す」に当てはまる．

(25)は，上手という評判で得意客も多い一方，仕事を「づらして（打ち捨てて）」遊び回る女髪結いが，女弟子と鍋を食べながら客の悪口を言っている場面である．話のはじめの部分でこの客は「ほんまにこんどハづらしておくれなヱ（本当に今度こそは約束を違えないでおくれよ）」と髪結いに頼み，半衿をくれる．髪結いは客がくれた半衿をかげで嘲り，髪を早く結わせるための贈り物だろうと言う．それに弟子が調子を合わせて，「又(また)づらしてやつたら」客がえらく怒るだろうと言っているが，怒らせるのはよくないという意図ではなく，むしろ怒らせたら小気味がよいというような不敵な態度にみえる．「づらす」主体は髪結いであり，「づらしてやったら」は弟子から髪結いに対するテ敬語であるとも取れるが，ここでは女弟子が髪結いの悪事の共謀者として「づらしてやれ」と言っている，女弟子自身が「相手に悪い影響の及ぶ行為」をする意志を持っているものと解しておく[14]．

(26)は舞屋の師匠が代稽古の娘と二人で教え子の悪口を言っている場面．師匠が教え子の顔や不器用さをけなしたのに対して，代稽古の娘は教え子の金持ちの親が衣装を張り込んだのを惜しがっており，次のおさらい会で入り合わせ（埋め合わせ）をさせようという．つまり教え子の親に，衣装ではなく他の何かで，師匠側にお金をどっと落とさせようというように「相手に悪い影響の及ぶ行為」を企んでいるものであろう．

(27)は(13)(14)と同じく浄瑠璃の師匠が教え子の悪口を言っている場面で，「ひきつぶしてやる」の「て」の後ろに「も」が挟み込まれ，強調された形である．「ひきつぶして」は，「地合い」のところならば，弟子の下手な浄瑠璃語りに師匠自身が弾く三味線の音をかぶせて聞こえにくくすることができる，ということであろう．やはり「相手に悪い影響の及ぶ行為」をわざとする意志を持っているのである．

3.3　話の内容・人物と罵り表現の出現

表２では，全てのエピソードを順に並べ，罵り表現の出現箇所を示す．「人物と場面の設定」は，原文からことばを借りながら内容を表した．セリフを話す主要な登場人物を四角で囲み，罵り表現の発話者にはさらに下線も付した．叱る・悪口のような行為を表すことばには，二重の下線を付した．「罵りの発話者」の欄には発話者の性別と年代を示した．「中」は中年，「若」は若年を表すが，年齢は文中に明示されないので，嫁を若年，姑を中年とするような相対的な大まかなものである．「罵り表現」の欄には，助動詞もしくは

補助動詞をカタカナで示し，それ以外に目についた罵り表現[15]は括弧に入れて平仮名か漢字で記した.*をつけたのは，この平仮名か漢字で表記した罵り表現を使った話者の印である.

表２　話の内容・人物と罵り表現の出現

原文番号	人物と場面の設定	罵りの発話者	罵り表現
初ノ二	稽古屋帰りに下女に習って買い食いするお嬢さん		--
初ノ三	半玉に買物をねだられる吝嗇な隠居親父		--
初ノ四	愛想のよい呉服屋の手代と稽古屋の娘		--
初ノ五	武芸自慢するが実は小心な侍の独り言	男・中	オル
初ノ六	寺の代参は下女にさせて，芝居へ行きたがる嫁		--
初ノ七	檀家の法事から帰る生臭和尚が弟子を叱る	男・中	クサル
初ノ八	亭主の浮気に悋気を起こし激怒する女房	女・中	クサル，テケツカル，テヤル，（～め）
初ノ九	駕籠人足から返済を催促される医者	男・中*	（馬鹿野郎）
初ノ十	客からお金をもらった女郎が借金を返す算段をしてお使いを小女に頼む，大口貸主への腹立ち	女・若	オル，（あいつ）
初ノ十一	若旦那たちに教える俳諧師の紹介		--
初ノ十二	昼叱りつけた丁稚に夜這いを見つかった番頭	男・中	テケツカル，クサル，（さらす[16]，ぬかす，～め）
初ノ十三	やりくりが苦しい売れっ子芸妓と妹		--
初ノ十四	あんまに実情をぶちまける茶人	男・中*	（馬鹿，ぬかす，やらかす，～め）
初ノ十五	客にべんちゃらするが，かげでは大いに悪口を言う女髪結と弟子	女・若	テヤル
二ノ二	雪見から帰宅して女房に仲間の悪口をいう風雅人	男・中	クサル，アガル，テケツカル，（あいつ，ぬかす，うせる，～め）
二ノ三	女房の前で抜け目なく振舞い，遊びに行く亭主と友達		--
二ノ四	祝儀を勘定しつつ教え子の悪口を言う舞の師匠と代稽古の娘	女・若 女・中*	テヤル，（耻(はじ)しらず）

二ノ五	不真面目でいい加減な儒者と道具屋		--
二ノ六	米屋相手に難解な言葉で値切る貧しい学者		--
二ノ七	船への使いの帰りに夜鷹をからかって遊ぶ丁稚	男・若 女・若*	テケツカル，（ぬかす，〜め，〜め*）
二ノ八	好みでない客について茶屋の女にこぼす芸妓	女・中*	（小便たれげい子が）
二ノ九	客の悪口を朋輩に向かっていう中居	女・中	クサル，（ぬかす）
二ノ十	丁稚を呼びつけ金の心配をする手代		--
二ノ十一	旦那のお供で来た下男と話し合う茶屋の内儀		--
二ノ十二	姑が嫁を親戚に紹介して回る		--
二ノ十三	花嫁を見た親戚の娘とその母が花嫁の悪口をいう		--
二ノ十四	実母に姑の悪口をいう花嫁		--
二ノ十五	嫁の留守にカルタで遊び，下女を罵る姑	女・中	オル，（おのれ，どぬすとめ）
三ノ二	かげで教え子の悪口をいう稽古屋と女房	男・中	テヤル，ヨル，オル，（やらかす）
三ノ三 三ノ四	旦那が帰ると愚痴をこぼす妾と適当にいなす下女		--
三ノ五	やりくりして暮らす幇間と女房	男・中	ヤガル
三ノ六 三ノ七	親類には健気らしく振舞うが実は色ごとに夢中の若後家と下女		--
三ノ八	世話した娘の悪口を言う仲人と女房		--
三ノ九 三ノ十	姑を送り出した後，悪口をいう嫁と隣の内儀	女・若	クサル
三ノ十一	嫁の悪口を言い合う姑二人		--
三ノ十二 三ノ十三	預かったかんざしに不正を働く職人と雇い人		--
三ノ十四 三ノ十五	手代二人が仕事中に飲み食いし，一方の父親に出くわして叱られる	男・中	オル，クサル

4　考察

4.1 使用人物の性別と年代について

罵り表現項目（助動詞・補助動詞）を使用した人物を，性別と年代の組み合わせ別にあげてみると次の表３のようになる. ただし表２における*の人物，すなわち助動詞・補助動詞の罵り表現を用いていない人物は省略した.

表３　罵りの助動詞・補助動詞の使用人物

	クサル	ヨル・オル	テケツカル	ヤガル・アガル	テヤル
男・中年	和尚 番頭 風雅人 父親	侍 稽古屋 父親	番頭 風雅人	風雅人 幇間	稽古屋
男・若年			丁稚		
女・中年	女房 中居	姑	女房		女房
女・若年	嫁	女郎			髪結の弟子 代稽古の娘

全体にみて，罵りの助動詞・補助動詞は，男女・世代に関わらず使用されるものであるといえよう.

ただし，男性については，中年層が圧倒的に多い. 若年層男性では二ノ七の丁稚だけが用いている. 丁稚という設定の人物は，初ノ十二と二ノ十にも出てくるが，それらの話においては，罵り表現を使っていない. おそらく，初ノ十二では番頭，二ノ十では手代，という目上の人物，しかも同じ商家における上司にあたる人物が話し相手であり，例え第三者の動作についてであっても，罵り表現を使うことは憚られるのかもしれない. それに対して，二ノ七の丁稚は，話し相手が夜鷹（惣嫁）であり，気楽に罵り表現を使えるのであろうと思われる.

男性・中年層の人物が話している相手は，独り言の侍を除けば，全て自分よりも目下，もしくは女房である.

女性の場合，自分よりも目下の人物と話しているケース（姑→下女）や同格の相手と話しているケース（嫁→隣の内儀），独り言のケース（初ノ十の女郎）もあるが，初ノ十五の髪結いの女弟子，二ノ四の代稽古の娘のように，自分の師匠あるいは師匠筋にあたる人物と話している際に，罵り表現を使っている場合がある. この２つのケースはいずれも，相手が目上ではあっても，かなり仲間意識の強い関係であると思われる.

4.2 使用人物の行為について

罵り表現項目（助動詞・補助動詞）を使用した人物が，罵り表現を用いてどのような行為をしたか分類してみると，次のようになる.

・叱りつける：初ノ七の和尚，初ノ十二の番頭，三ノ十五の父親.
・怒り・腹立ちを表出する：初ノ八の女房，初ノ十の女郎，二ノ十五の姑.

・悪口を言う：初ノ十五の髪結いの女弟子，二ノ二の風雅人，二ノ四の代稽古の娘，二ノ九の中居，三ノ二の浄瑠璃の稽古屋，三ノ十の嫁.
・からかう：二ノ七の丁稚.
・決まり文句で軽く罵る：三ノ五の幇間.

「叱りつける」のは，年長の男性ばかりである.それに対して，「怒りの表出」は女性のみであった.「悪口」は性別・年代に関わらない.「からかい」「決まり文句で軽く罵る」は男性のみであったが，用例が少ないので傾向として述べることはできないだろう.

4.3 悪口と罵り表現使用との関係について

表2で示したように，悪口を言うことが話題のメインであっても，罵り表現の助動詞・補助動詞が出現しない場合があった.二ノ十三，二ノ十四，三ノ八，三ノ十一，である.

これらの話における悪口になぜ罵りの助動詞・補助動詞が出現しないのか，観察してみよう.

まず二ノ十三は，悪口を言う相手と直接には接しておらず，悪口の発信者は何も被害を受けていない.親戚への挨拶回りに花嫁が来たと聞いて，「茶碗をけちらし烟草盆につまづき」ながら奥より走り出て「のぞき」，と好奇心満々で見た挙句，鼻が低いだの髪型が不細工だの着物が借り物だのと，気楽に悪口を言っているのである.この「被害を受けていない相手」と言う点で，二ノ二の風雅人のケースとは対照的である.風雅人は仲間に付き合って雪見に行ったせいで，寒くてたまらず，忌々しさのあまり，クサル・アガル・テケツカルなどの罵り表現を連発している.

二ノ十四は，花嫁が里帰りして実母に向かって姑の悪口を言っているのだが，「小言をよういふてむつかしお升でエ」とは言いながら，「あんた（＝実母）と一所(いつしよ)で気が短かふていらいらいひ通しで」と実母への文句もついでに言っていたり，「どこやらが臭て」などと面白がっていたりして，真剣に悪く言っているようではない.まだ結婚したばかりで，姑に対してさほどの恨みつらみが積もってはいないのだろう.逆に，恨みつらみのあるケースとしては，二ノ四の舞稽古の教え子や三ノ二の浄瑠璃の教え子に対するそれぞれの師匠は，下手くそな弟子に教え続けなければ生活が成り立たないことについて相当にうんざりしていることが感じられる.

三ノ八では，仲人の女房が，夫の世話した娘について「とほうもないあんな者(もん)」と悪く言う[17].広い日本にまたとないひどい「みつちや」（あばた）だとか，おしろいを塗るとまるで金平糖だなどと，かなり大げさな言いぶりである.一方，夫である仲人は，「うすみつちやと申たハ碓(うす)のやうなみつちやじやといふたらよひ」などとふざけた答えをしている.

三ノ十一はそれぞれ自分の嫁の悪口を言い合う姑の話だが，これもかなり大げさ，かつ，たとえによるけなしが見られる.一人の姑は，嫁が大食いであることを，まるでうごろもち（もぐら）の穴へ乾ずなを入れるような，と言ったり，うるさく喋ることを，扇を折って叩いているようだと言ったりする.もう一人の姑は，嫁の髪について火のつくような頭と言ったり，歯についてまるでタニシの和え物と言ったり，嫁の顔はオコゼがびっくりしたような顔だと言ったりする.ほとんど悪口合戦である.

以上のことから，直接被害を受けていない相手への悪口，さほど恨みつらみがこもっていない場合，大げさな表現やたとえ表現を重ねてけなす場合は，罵りの助動詞や補助動詞を使わない，という可能性が考えられる.

4.4 動詞との関係

ここでは，それぞれの助動詞・補助動詞がどのような語に接続したのかを見てみる.

表４　罵りの助動詞・補助動詞が接続した動詞類

助動詞・補助動詞	動詞類
クサル	ぬかす（3 例），言わす，書いておこす，だます，ぼうはる，なぶる，来る
ヨル・オル	びっくりさせる，言うてくる，勝っている，槍を入れる，言う，する
テケツカル	どこにいる，いつまでかかる，何をぐづぐづする，・・とくる
ヤガル・アガル	歩かせる，置く（起きる）
テヤル	かきみしる，外聞わるする，突きさがす，づらす，入り合わせする，弾きつぶす

クサルは言語表現を表す動詞につくケースが多い．「ぬかす」は言語を発する動作そのものであるが，「ぼうはる」「なぶる」もことばを使った行動であり，「言わす」「だます」もそれに近いものがある.

テケツカルは，疑問詞と共起している例が多い．これは先行研究では特に記述されていなかったことである[18].

テヤルがつく動詞（意味内容）は，今後実現しうることも含まれているが，実際には起こらないことも含まれている．テヤルは相手に悪い影響が及ぶ自分の動作につくのであるが，この言葉を使うことにより，仮想現実を作り出す力もあると言ってよいだろう.

4.5 罵り表現の機能

星野(1971)は「悪態」の機能として，「個人と個人を離反させて期待させる顕在機能と，むしろ集団の中の個人を結合させ連帯させる潜在機能がある」という．ただし，星野のいう潜在機能を持った「悪口をいいあう仲」というのは，A と B が互いについての悪口

を言いあう仲である[19]．しかし本稿では，Aについての悪口をBとCが言い合うことにより，BとCが連帯を強めている例が見られた．したがって，本稿のはじめに罵り表現の機能として挙げた「マイナス待遇表示機能」「親愛表示機能」「カタルシス機能」の３つのうち，親愛表示機能は，次のように２つに分けることも可能である．

① 相手についての罵り表現を使っても関係が壊れないくらい，相手と親しいことを表す．
② 第三者への罵り表現を相手と共有することにより，相手への親しみを表す．（髪結の女弟子，稽古屋の弟子のケース）

カタルシス機能についても，次のように２つに分けることが可能ではないかと考える．

① 相手への悪意を表出することにより，自分の気持ちをスッキリさせる． 密かな仕返しをしたことになり，相手から受けた精神的被害を少しでも減じることができる．
② ことばを駆使する快感を味わえる．つまり良いことばを使う表の顔と悪いことばを使う裏の顔を使い分けできる自分を，高く評価して満足することができる．

カタルシス機能の②については，今まであまり記述されてこなかったのではないか．この②の機能が働くためには，上品な良いことばを使おうと思えば使える，ということが前提となる．つまり，ことばをコントロールして使い分ける能力の豊かな人物が，場面や相手に応じて罵り表現を使うことで，この機能が働くのである．

５　まとめ

以上，本稿では「穴さがし心の内そと」に出現した罵り表現としての助動詞・補助動詞について検討した．その結果，次のようなことがわかった．

(a)「穴さがし心の内そと」におけるプラス待遇・マイナス待遇の助動詞・補助動詞のうち，マイナス待遇のものの出現数は，約４分の１を占める．

(b)クサルは本気の罵り，軽い罵り，叱りつけなどに使われる．

(c)ヨル（オル）は強い罵りにも軽い罵りにも使われる．また，第三者待遇だけでなく，対者待遇にも使われる場合がある．

(d)テケツカルは強い罵りの場合が多いが，ふざけて使うケースもある．

(e)テヤルは強い罵り，強い忌々しさを表すようである．

(f)罵りの助動詞・補助動詞の使用には，男女差はあまりないようである．ただし男性の場合，話し相手との上下関係にかなり縛られるようである．女性の場合は，話し相手が仕事上の目上であっても，仲間意識が強い場合は使えるようである．

(g)罵りの助動詞・補助動詞は，叱りつけ・腹立ち表出・悪口・からかいなどの行為や決まり文句として使われる.

(h)悪口が話題の中心であっても，被害を受けていない気楽な悪口の場合や，大げさな表現や例えの表現を繰り返して悪口を言う場合は，罵りの助動詞・補助動詞を使わないケースもある.

(i)クサルは言語表現を表す動詞につく場合が多く，テケツカルは疑問詞と共起する場合が多く見られた.

(j)罵り表現の持つ親愛機能は２つに分けられる．罵り合う相手への親しみを表す場合と，誰かをともに罵る相手への親しみを表す場合である.

(k)罵り表現の持つカタルシス機能は２つに分けられる．悪意を表出することによって自分の中の被害感を減らす機能と，ことばをコントロールできる能力のある自分に快感を感じる機能とである.

６　おわりに

罵り表現は，その語形に関する一般的な印象としては，野卑で粗雑なもの，というイメージがあるかもしれない. しかし，使われ方を観察してみると，粗雑な人が粗雑に使うものでは決してなく，この場面・この文脈でならば使える，というとっさのあるいは無意識の判断のもとに，計算された上で使われているとみえる. つまり，罵り表現の運用のされ方については，粗雑どころかむしろ精密で洗練されたものと言ってよいのではないか.

本稿では幕末期に限定したが，今後，近世や明治以降についても検討していきたい.

【注】

[1] 本稿での「罵り表現」の定義は,「人を悪く言うため，あるいは相手を悪く扱うために使うことば」としておく.

[2] 罵り表現を総合的に詳しく扱った珍しい研究として山崎(1963)がある.

[3] 米川(1999)では卑罵表現の機能として「カタルシス機能」と「親愛表出機能」とが挙げられているが，本稿ではそれら以外に基本的なものとして「マイナス待遇表示機能」があると考えてここに挙げた.

[4] 湯沢(1957)に「ぞんざい動詞」としてウセル，クタバル，クラウ，ケツカル，ヌカスなどが載っている.

[5] 質問票調査で罵り表現を調べたものとして田原・村中(2002)があり，クサル・サラス・ヤガル・テコマス・テケツカルの使用について尋ねている.

[6] 「穴さがし心の内そと」におけるナサル・ナハル・ヤハル・ハルの出現数は村中(2015)による.テ敬語の数は金沢(1992)によると 29 であるが，そのうちの 1 つを本稿筆者はテ敬語ではなく不利益供与のテヤルとみるため，1 つ減らして 28 とする.詳しくは注 14 を参照されたい.

[7] マイナス待遇の 7 つ（ヤガル，クサル，サラス，テケツカル，ヨル，テヤル，テコマス）とプラス待遇の 5 つ（ナサル，ナハル，ヤハル，ハル，テ敬語）で待遇表現に関わる助動詞・補助動詞を 100%網羅できているとは限らないが，近代の大阪方言においてはおおよそ網羅しているものと考えることにする.

[8] 『日本語歴史コーパス』には，奈良時代から明治・大正時代にわたって，選ばれた資料が収められている．江戸時代編としては洒落本と人情本のデータがあり，洒落本は『洒落本大成』（1978-1988 中央公論社）を底本とした 30 作品（大坂 10，京都 10，江戸 10）のデータが格納されている．本稿においては，時代を限定せずこのコーパス全体を検索対象とした．短単位検索と文字列検索の結果を付き合わせ，文脈を確認した.

[9] 用例の表記は，ルビも含めて全て前田(1974)に従っているが，パソコンの機能上の理由から，続け字記号を仮名・漢字に起こしたところがある.(7)「ポンポン」，(9)「折々」(18)「ぐづぐづ」(19)「じりじり」(20)「わざわざ」である．なお，前田の表記は，「変体仮名を現行普通の仮名に改めた外は表記法一切原本のまま」である.

[10] ただし初ノ一，二ノ一，三ノ一は，「序」であって物語とはみえない.また三ノ三と三ノ四，三ノ六と三ノ七，三ノ九と三ノ十，三ノ十二と三ノ十三，三ノ十四と三ノ十五，はそれぞれにまたがってセリフのやりとりが続いており，ひとつの物語といえる.ゆえに，物語の数は，45 ではなく 37 といえる.

[11] 「ぼうはりくさって」の動詞「ぼうはる」は牧村(1979)によれば「反抗する．意地になってたてつく.」という意味.

[12] テオル，テヨルの形はアスペクトとの区別が困難な場合もあると考え，ここでは対象として含めていない．ただし，テイオルの形は含めている.

[13] 星野(1971)で，日本語にも外国語にもあるという「はやしことば」がこれに相当するだろう.リズムに富み，韻を踏んでいるところは各国共通，とある.

[14] 金沢(1992)はこの用例をテ敬語と解釈している.「穴さがし心の内そと」におけるテ敬語の出現数については，山本(1990)では全 25 例，金沢(1992)では全 29 例となっており，このズレについて，金沢(1992)の「追記」に詳しい説明がある.本稿筆者は概ね金沢説に同意するものであるが，この「づらしてやったら」の下線部については，金沢もその可能性を認めている「進んで相手に不利益を与える意」の解釈をとりたい.なお，前田(1952)では「それを又づらしてやったら，ゑらふ怒り升やろうナ」の下線部分にのみ指定の助動詞の印をつけているので，「づらしてやったら」の「や」を指定助動詞とは解していない，すなわちテ敬語とは見ていないようである.

[15] 例えば初ノ九，初ノ十四，二ノ八には，罵りの助動詞・補助動詞は出現しなかったが，罵り表現自体は出てきたことを示すために，括弧内の表現を表に入れた.ただし，助動詞・補助動詞以外の罵り表現については，必ずしも網羅的に表に入れることができたわけではない．山崎(1963)のように同じ罵り表現の中でも体言・動詞・補助動詞などの使用の関係がどのようになっているかを考察するのが望ましいが，別の機会に譲る.

[16] この「さらす」は「ぢようだんさらす」で，助動詞ではなく「する」という意味の本動詞.「穴さがし心の内そと」には助動詞としてのサラスは見当たらなかったが，本動詞

としてのサラスはいくつか出現した.
[17] 原文では「アヽとほうもないあんな者」の右上に小さな字で「仲」とあるが，このセリフは続きで「おまへまで已来銭屋へ出入がならぬやうにならふぜ」とあり，仲人をした夫の心配をしているようなので，仲人のセリフではなく女房のセリフであると思われる.
[18] 郡(1997)の「ナンカシテケツカル」（何をぬかしてけつかる）のように，疑問詞と共起する例文を挙げたものはある.
[19] 星野(1978)に『男はつらいよ』における寅さんと叔父の罵り合いの例が挙げられている.

【参考文献】

楳垣実, 1962, 「近畿方言総説」楳垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂, 1-59.

金沢裕之, 1992, 「明治期大阪語の『テ敬語』表現」『地域言語』4：1-14.

郡史郎, 1997, 「総論」平山輝男編『大阪府のことば』明治書院, 1-61.

国立国語研究所(2019)『日本語歴史コーパス』
https://chunagon.ninjal.ac.jp/(2019 年 5 月 7 日確認).

田原広史・村中淑子, 2002, 『東大阪市における方言の世代差の実態に関する調査研究 2 -待遇表現-』平成 9・10 年度東大阪市地域研究助成金研究成果報告書２.

西尾純二, 2005, 「大阪府を中心とした関西若年層における卑語形式「ヨル」の表現性-関係性待遇と感情性待遇の観点からの分析-」『社会言語科学』7(2):51-65.

星野命, 1971, 「あくたいもくたい考-悪態の諸相と機能-」『季刊人類学』2(3):29-52.

星野命, 1978, 「現代悪口論-けんかことばの諸相と原理-」『言語生活』321:18-32.

前田勇, 1949, 『大阪弁の研究』朝日新聞社.

前田勇, 1952, 「指定助動詞「や」に就て」『近畿方言』12：7-12.

前田勇(翻刻), 1974, 「一荷堂半水『穴さがし心の内そと』」『近代語研究第４集』武蔵野書院, 429-484.

牧村史陽, 1979, 『大阪ことば事典』講談社. （縮刷再録：1984, 『大阪ことば事典』講談学術文庫.）

村中淑子, 2015, 「大阪方言におけるナサル・ナハル・ハル等の変遷について-幕末期から織田作までの予備的検討-」『地域言語』23：1-14.

山崎久之, 1963, 『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院.

山本淳, 1990, 江戸戯作小説に現れる「テ＋指定」待遇表現をめぐって」『国学院雑誌』91-11:43-66.

山本俊治, 1962, 「大阪府方言」楳垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂, 421-494.

湯沢幸吉郎, 1957, 『増訂 江戸言葉の研究』明治書院.

米川明彦, 1999, 「卑罵表現も変わりゆく」『月刊言語』28(11):30-33.

＊＊

【編集後記】

『現象と秩序』第 10 号記念号をお届けします．これまで，半年に 1 冊ずつ発行してきましたので，2014 年 10 月の創刊以来，刊行前の準備期間を入れて，丸 5 年がたったということになります．ひとつの区切りと考え，総目次（発行順と著者名順）を掲載しました．また，この総目次の冒頭には，堀田委員による「ふり返り」が掲載されています．特集間関係を中心に，本誌がゆるやかなまとまりをもって発行され続けてきたという内容です．この記事と「総目次」をガイドにして，過去の号に掲載された諸論文を読み返して頂ければ，幸いです（全ての号が WEB 上に存在し，かつ国立国会図書館にも入っています）．

本誌は，一見ばらばらな論考の寄せ集め誌にみえます．しかし，一定の方向性はある（あるいは，出てきた），とも言えるのではないでしょうか．たとえば，本号の第 2 論文の末尾では，つぎのような主張がなされています．「罵り表現の運用のされ方については，粗雑どころかむしろ精密で洗練されたもの」（本号 35 頁）であることが発見された，という主張です．罵るときに，人はぞんざいな言い方をしますが，そのぞんざいさのなかに，ぞんざいさにおいて，洗練が見い出される，というのです．過去に掲載されたエスノメソドロジー系の論文においても，似た主張がありました．例えば，先号の舞弓・樫田論文では，看護学生の「無駄な質問（知っているはずのことを聞く質問）」中に，看護学生の「専門家的慎重さ」が読み取られています（9 号 50 頁）．両論文の主張はともに，一見誤った/乱雑な「現象」のなかにも，有意味な「秩序」があることの発見として，位置づけることができるでしょう．いずれも本誌らしい論文といえると思います．最近は『現象と秩序』という本誌の誌名が各論文から透けてみえるようになってきている，というと言い過ぎでしょうか．

11 号からは，堀田裕子氏に編集長を交代します．次の 5 年間も『現象と秩序』誌を，どうぞよろしくお願いいたします．　(Y.K.)

＊＊

『現象と秩序』編集委員会（2018 年度）
編集長：樫田美雄
編集委員：樫田美雄(神戸市看護大学)，　中塚朋子（就実大学），　堀田裕子（愛知学泉大学）
編集幹事：松田侑子（神戸市外国語大学）
編集協力・印刷協力：村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第 10 号記念号　　2019 年　3 月 31 日発行

発行所　〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4
神戸市看護大学　樫田研究室内　現象と秩序企画編集室
電話・FAX）078-794-8074（樫田研），e-mail:　kashida.yoshio@nifty.ne.jp
PRINT ISSN　：2188-9848,　ONLINE ISSN　：2188-9856
http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html